信毎俳壇

神野 紗希選

綿虫の濃をはぐれて縋り来る　（大町市）原田 勝

凍滝へ落つる凍滝神不在　（松本市）久我 綺乃

戦争の回あり冬の月の暈　（長野市）せきたつお

暴天に瓦礫踏りつむ聖樹かな　（松本市）竹内 京子

人々にことごとく名やクリスマス　（千曲市）たじまたける

へばりつく冬たんぽぽにほほゑめり　（佐久市）佐藤 勝子

初雪や白は美しい白髪も　（中野市）増田きみ江

干し芋のほどよく乾きちゃんちゃんこ　（富士見町）鬼束 淳子

一鉢のポインセチアが交番に　（長野市）井出 節子

煤逃げやそっと差し出すケーキ一個　（佐久市）木内利一郎

……佳作……

妙見や除夜のボラリス不動かな　（飯山市）滝沢 秀晋

霜晴れや仕上げに飾ふ紛砂糖　（立科町）村田 実

選評

一句目、綿虫にも心があるか。「縋り来る」に命の切実を見た。二句目、なるほど、滝は凍りながら落ち続けているのだ。神はいないと絶望する世界で、凍滝は厳然とそこに在る。三句目、月光の環は母えと人間の所業を照らす。四句目、暴天の重さに戦禍の苦しさが、聖樹に祈りが託された。五句目、亡くなった人々にもそれぞれ名前があり人生があった。数字で語れない、命のかけがえのなさよ。

坊城 俊樹選

十二月奇襲は八日十四日　（長野市）白鳥 寛山

神が住み魔も棲むといふ山眠る　（安曇野市）丸山 進弘

毎年の海の匂ひの盛暮かな　（飯綱町）深井 秀男

極月や夢の中まで大掃除　（長野市）宮沢 朝子

鶴三羽る江戸千代紙や年新た　（長野市）萩原 宏祐

行列の中の一人や年の暮　（長野市）松本 宏夏

老木は蒲木抱きて冬安居　（坂城町）草下 和夫

凍蝶焚くマッチに風の集まり来　（千曲市）たじまたける

鷹匠の天を指す手に凍蝶たる　（長野市）北沢 陸江

元朝やフェルマの光届き初め　（長野市）水木 朱実

……佳作……

言の葉も透き通りたる寒きかな　（高山村）五味 力

神の留守石の鳥居の軋む音　（松本市）滝沢征矢子

選評

一句目、12月の奇襲と言えば、8日は日本軍による真珠湾攻撃、14日は赤穂浪士たちの吉良邸への討ち入りではなかろうか。年が押し詰まると血気盛んになるのか。二句目、長野県のアルプスのことか。崇高なる神も住み、時には魔物も棲む恐ろしい雪山となる。三句目、お歳暮で海の匂いとはカニ、ホタテ、タラなどを思うがどれも美味の極致。それが毎年来るとなるとなんと幸せなことか。

今井 聖選

午前一時厨の奥に冬の滝　（原村）加藤津恵子

極月や柩に始祖鳥らしきこと　（坂城町）納沢 満則

磨帰り指で綾引く冬の星　（佐久市）真山 邦弘

小春日のグラタン焼くにほひかな　（長野市）宮沢 朝子

荒巻や裸電球吊るし売る　（長野市）萩原 宏祐

溜息を袋に詰めて日向ぼこ　（松本市）中野 晴夫

小鳥来て猿来て柿を食び尽くす　（伊那市）中村 初治

頂に雲の寿ある雪催　（飯田市）大石 昭重

湯治場の入浴券の冷たさよ　（松本市）今井 茂雄

駅伝の郵大路や着ぶくれて　（富士見町）鬼束 淳子

……佳作……

踏台の一段だけの年用意　（佐久市）西田 和彦

深海に不変の闇や去年今年　（長野市）武田 芳子

選評

一句目、内面的イメージが膨らむ。深夜、台所の奥に滝が轟然と落ちてくる。蛇口からの水音がきっかけかもしれない。二句目、鳥の起源とされる太古の「始祖鳥」を師走の日常の中にイメージした。文明批評やユーモアも少し。三句目、塾帰りの子が夜空を見上げ星と星を曖昧な線でつなぐとたちまちその子だけの星座が出来上がる。宇宙に「未来」を拓くということの暗喩ともとれる。